

正木篤三も同日講師（東洋文学担当）に採用された。彼は明治三十八年八月十九日正木直彦の三男として東京に生まれ、東京府立第四中学校、第一高等学校を経て大正十五年東京帝国大学文学部東洋史学科に入学、のち国文学科に転じて昭和五年三月卒業し、直ちに美術研究所所員となり、次いで本校講師となった。

入谷昇は四月十五日に教務嘱託（彫刻科勤務兼教務掛）に採用された。彼は明治二十一年九月三十日香川県に生まれ、同県工芸学校を経て本校彫刻科に入学、明治四十四年卒業以後は自営し、大正七年から同十年まで世界玩具株式会社原型部主任をつとめ、昭和四年七月以降は田端の板谷波山工場に勤務していた。彼は北村西望、和田季雄の推薦により起用された。

内藤春治は六月三十日に講師（鑄造実習担当）に採用された。彼は明治二十八年四月一日岩手県に生まれ、大正五年盛岡市私立商業学校を卒業後直ちに南部鑄金研究所に入り鉄器鑄造を研究し、同八年上京して香取秀真に師事。翌九年本校鑄造科に入学して同十四年に卒業した。研究科に在学中、パリ万国裝飾美術工芸博覧会、商工省主催工芸展覧会、帝展第四部等に入賞、入選し、昭和四年以降本校助手（工芸化学教室勤務）をつとめていた。

深瀬嘉臣も同日講師（金工実習担当）に採用された。彼は明治三十二年九月十八日東京に生まれ、京北中学校、東京府立工芸学校を経て本校金工科に入学、大正十二年に卒業した。同十五年以來本校助手をつとめていた。

羽野禎三も同日講師（図案実習担当）に採用された。彼は明治三十五年九月十五日石川県に生まれ、同県立工業学校を経て本校図案

科に入学、昭和二年に卒業して直ちに助手となった。

高野重人（号松山）も同日講師（工芸製作法担当）に採用された。彼は明治二十二年五月二日熊本県に生まれ、京都市立美術工芸学校漆工科を経て本校漆工科に入り大正五年卒業。同八年本校雇（教授白山松哉付き助手）、次いで助手となった。

白川一郎は四月三十日に講師（用器画法、遠近法担当）に採用された。彼は明治四十一年七月十四日香川県に生まれ、丸亀中学校を経て本校西洋画科に入学、昭和七年卒業した。小林万吾と鈴川信一の推薦によって本校に採用された。教職科目の用器画法と遠近法の授業はこの白川と、鈴川信一（退官後昭和七年五月十日付で講師として再起用）が担当することになった。前に鈴川とともにこの二科目を担当していた助教長野新一は病気のため欠勤が続いていたところ、五月十一日に休職を命ぜられた。

南薫造は西洋画科教授和田英作が校長となって空席が出来たため、八月三十一日、後任として起用された。彼は明治十六年七月二十一日に広島県に生まれ、同県第一中学校を経て本校西洋画科に入学、同四十年卒業して間もなくイギリスに留学し、ポロージョンに洋画技法を学び、同四十二年にはフランスへ移り、また、欧州各国を巡歴して翌四十三年に帰国した。大正四、五年には美術研究のためインドを旅行し、大正五年以降は文展、帝展審査委員をつとめ、昭和四年に帝国美術院会員となった。

⑦ 男女共学実施計画

昭和六年度年報の「将来施設上重要ト認ムル件」に明らかかなよう

に、この年度より「女子部新設」計画が「女子共学」即ち男女共学実施要求へ変わった。六年度年報が文部大臣に提出されたのは昭和七年五月三十日で、この日、和田英作が校長に就任した。左記の和田の文を読むと、男女共学実施計画は和田の意見を反映したものであったことが分かる。

男女共学の問題

正木先生の校長在任の頃、美校に女子部を設ける話はあつたのですが、若しも許されるなら、僕は共学を實現したい。男子が通つて来る關所を、やはりくぐつてくるのでなくては駄目だと思ふ。女子だからと云ふハンデイヤップをつけてはいけないと思ひます。すでに私立で女子美術學校があるのだから、美校に女子を入學させることになつたら、嫁入仕度まがひのものでなく、男子と競つてやつて行かうと云ふのでなくては意味がない。たゞ問題は風紀に關すること、これを心配してゐる向きもある様だが、現在音楽學校では共学をやつてゐても、風紀の上で云々されると云ふ様なことは聞かない。私は風紀上の弊害は無いと思ふ。それに今の女は昔と違つて男子に輕蔑されまいと云ふ自尊心がありますし、又一方から考へれば、逆に風紀が却つてよくなりはないかとさへ思つてゐます。男子の生徒の中に女子が一人入つてくれば、すべて慎む様になつてお行儀がよくなると思ひます。現在、何んにしても、同等の力を有して居るに不拘、女なるが故に男が受け得る教育を授けられぬといふ道理もなく、又、其爲めの教育機關のないのは不合理です。これは純粹美術の方のことに就

てですが、師範科の事を考へてみると、女學校の先生はどうしても女の方が男よりよいと思へる。一般論として女が男より程度が低いものとされてゐますが、假令一般には低くとも、中には優秀な技能の所有者があると思ひます。女に對して同情もあり、すべてをよく知つてゐる女人が、其優秀な技能の所有者であるならば、夫れは女學校の先生として男子より遙かによいのではありませんまいか。仲々文部省の方では許して呉れませんが、時代が大部變つてきてゐるのですから差支へはないと自分は思つてゐます。又女は男の感じない特別の世界を感じるから、女にしても男と競つて行く力のある人なら又面白い結果も得られるでせう。

（『アトリエ』第十一卷第五号所収「和田英作氏美術漫談」より。
昭和九年三月）

⑧ 和田校長による改革

和田英作は校長就任とともに教育改革に着手した。『美之國』第八卷第八号（昭和七年八月）はこれについて断片的ながら次のような記事を掲げている。

美術學校の改革案

——和田校長の腕試し——

東京美術學校長に和田氏が就任して以來、氏が如何なる腹案を具體化するかが興味ある問題とされてゐたが、最近大體次の如き改革案が内定されたと聞く、課長制を設け經理課長に津田信夫氏、文庫課長に矢代幸雄氏、^{〔教〕}政務課長に佐々木卓三氏が新任、尙